

著者：高柳友彦

書名：『温泉旅行の近現代』

出版社：吉川弘文館

出版年月：2023 年 12 月

講評：

本書は、近現代の日本において温泉旅行が余暇活動として普及し大衆化していく様相を歴史的に考察するものである。内容と記述形式などから学術書ではなく、歴史文化に関心のあ
る読者を対象とした教養・啓蒙書であると判断される。

構成としては、プロローグで本書の方向性と考察の着眼点が示されたあと、第 1 章にあたる「温泉旅行の黎明 江戸・明治期」では、近世の温泉旅行と幕末・明治期の特権的な人々の温泉旅行について述べられ、交通インフラの整備による今後の発展可能性が示唆される。第 2 章にあたる「大衆化する温泉旅行 大正昭和戦前戦時期」では、温泉旅行が療養の要素を残しながら短期滞在型の観光行楽に拡大していく過程が描かれる。第 3 章にあたる「再興していく温泉旅行 昭和戦後期」では、戦後の温泉地の復興と高度成長下における温泉施設の大型化や交通機関、旅行会社、メディア戦略について論じられる。第 4 章にあたる「多様化する温泉旅行 一九七〇年代以降」では、旅行形態の少人数化と健康志向、バブルとバブル崩壊後の旅館と温泉地の対応が描かれる。「コロナ禍、そしてこれから—エピローグ」ではコロナ禍における温泉地と今後の温泉旅行が展望される。

本書に通底するのは、温泉旅行が普及していく歴史的現象の主体はあくまで温泉旅行者であるという視点である。温泉旅行の発達には宿泊産業や交通産業、メディア産業、行政機関などさまざまなアクターがそれぞれの役割を演じるが、そうした多様なアクターについての言及は各所にみられるものの、本書が考察対象とする主体はあくまで温泉旅行者である。そして温泉旅行者が形成されるための要件として以下の 3 点に著者は着目する。

第 1 にどのような人的関係の人々が温泉を訪れたのか。これは誰と温泉を訪れたのかということである。第 2 に交通機関および情報メディアと温泉旅行の関係である。温泉に行くに際してメディアからどのような情報を得、どのような交通機関を利用したかということである。第 3 に温泉地における滞在形態と費用である。これら 3 つの視点を通じて、各時代の余暇活動や消費、家族や人間関係、メディアが提供する温泉地情報、温泉地・滞在施設の選択と費用の関係、社会情勢と経済状況などが、温泉旅行が歴史的に変化していく諸変数として考察されている。

また本書では、温泉旅行が確立していく過程における観光遊興としての温泉と湯治療養としての温泉の関係が論じられている。両者のせめぎ合いはときには交代したり住み分けたり復権したりしながら、温泉旅行の形成に重要な役割を演じることが描出される。各章ではこれらの着目点等を共通の枠組みとしながら温泉にかかわる多岐にわたるできごとが整理され論じられる。

このように明確な視座が本書全体を通じてぶれることがなく設定されることによって、温泉旅行に関する歴史的事項が明解に関係づけられ、近現代の日本において温泉旅行が普及し大衆化していく過程が平易かつ巧みに説明されている。著者は近代日本の温泉資源管理を研究テーマとする観光研究者であり、温泉に関する膨大な史料を渉猟していることが想像されるが、その中から本書の論述に必要な史料が適切に選択されていることも特筆される。

温泉に関する書籍はけっして少なくないが、本書のように温泉旅行について通史的かつ網羅的でありながら、明晰な論述が展開される書籍は希有ではないだろうか。観光とりわけ温泉に関する歴史文化に関心のある読者に強く推奨できる。したがって、本書は、教育啓蒙著作賞に該当すると考える。

目次

温泉旅行という文化―プロローグ

温泉旅行の黎明 江戸・明治期

近世の温泉利用

幕末から明治初期

整備される道、宣伝される魅力

大衆化する温泉旅行 大正・昭和戦前戦時期

湯治療養と観光・行楽

不況下でも盛況

戦時中の旅行ブームの到来

再興してゆく温泉旅行 昭和戦後期

動き出した温泉旅行

レジャーの走りヘルスセンター

高度経済成長に湧く

多様化する温泉旅行 一九七〇年代以降

団体旅行から少人数へ

健康志向の高まりと湯治場

バブル期の旅館改築・増築

バブル崩壊と旅館の苦闘

二一世紀の温泉旅行

コロナ禍、そしてこれから―エピローグ